

Australian Library Journal. Vol. 27-4,
1978

Symons, Berry: The National Library
of Peking; an Australian librarian's
view. The Australian Library Journal.
Vol. 27-6, 1978

Castagna, Edwin: A visit to two Chinese
libraries. Wilson Library Bulletin. Vol.
52-10, 1978

Barclay, John: The four modernisations

embrace libraries in the People's Re-
public of China. The Australian Li-
brary Journal Vol. 28-7, 1979

Tsuneishi, Warren M.: U.S. librarians
visit the People's Republic of China.
Library of Congress Information Bul-
letin. Vol. 38-48, 1979

(1979. 12. 31)

(なかはら・ますゑ)

アジア・アフリカ課主査)

レファレンス
余話

レファレンスの先取りと云ってしまうと大げさだが、第一線の政治家の名前がマスコミを賑わす事態が起きると、該当者の伝記的資料の調査に取りかかる。それは法律政治課のレファレンスとして、間もなく求められるであろうことの子測である。最近でも、首相が決まるまでに、さまざまに取沙汰された何人かの候補者について、問合せを受けたことも例外ではなかった。また、とくにマスコミ関係者から待たなしの即答を要求されるのは“死去”の時である。人の不幸を予め用意するようで後めた話だが、危篤が報じられると現実には必至である。佐藤栄作総理や保利茂衆議院議長の場合もそうだった。概して政治家についての人物情報源の要求はかなり多い。電話の場合は現代の人、文書レファレンスとなると、あまり知名度の高くない古い時代の

人が多い。最近の伝記的事項調査の依頼にあった山中隣之助や日向輝武も、どちらかといえば馴みの薄い名前の代議士の一例だが、山中隣之助の場合、各種の「衆議院議員名鑑」に記載されるのは当然だが、履歴事項から判断し、『東京商業会議所会員列伝』(明治25)、で実業界サイドの部分を補充することが出来た。また出身地がわかると、その地の人物誌等で調べることもよくあるケースだ。逆に、かなり高名な人でも意外に“伝記”らしいものが見当らないこともある。高平小五郎もその例だった。彼は日露講和会議の全権委員や明治41年に高平・ルート協定を締結し、のち貴族院議員になった人だが、事典類にみえる記載程度を越えるものが見当らない。あとで調査依頼者から直接聞いた話だが、高平小五郎は、派手に頭彰されることを好まず、伝記書の類など一切出さないことを望んでいたとか。

(法律政治課 山口美代子)